

江戸時代はグローバルだった

教科書ではわからない近世社会

対談

田中 優子



橋川 俊忠

法政大学教授

本誌編集長

- 人も金も動いていた
- 海外と繋がっていた庶民生活
- 情報も人も繋がっていた
- 「多社会」社会としての江戸
- 動きと繋がりが生み出す想像力

万能の働き手百姓、海外市場をにらんだ商人、一攫千金を夢見た漁師、沸き立つ金山……。人びとは、土農工商の身分制にからめとられ、土地に縛られて暮らしを営んでいたという江戸時代のイメージを一新する。

人も金も動いていた

橋川●神奈川大学には日本常民文化研究所という研究所があつて、そこで網野善彦さんに引つ張られて能登を中心に二十年ほどずっと毎年毎年調査をしていました。網野さんの例の「百姓は農民ではない」という議論など、いろいろ教えられました。それで、どうも江戸時代というのは、教科書で書かれていることと違うな、今までのイメージというのは随分変えなければいけないんじゃないかということ

は、その頃から思っていました、それで田中さんのご著書を読ませていただいて、非常に興味をもったんです。まあ大体左翼のもっているイメージというのは依然として、極端に言えば山田盛太郎的暗い遅れた封建時代のイメージが強いので、必ずしもそうではないということを、少しは伝えられたらと思います。

田中●私も学生時代から網野さんの本はずっと読んでいます。もう必ずといっていいほど読んでいましたから、非常

に大きな影響を受けています。百姓という課題についても私がつている感触とやつぱりどこ重なっています。百姓は非常にたくさん仕事をしています。食べ物を作っているというだけではなくて、私がより関心があるのが産業の方なんです、布を織っていた。その原料である綿花を育てたり、養蚕をしたり、それから紙を漉く、楮こうやみつまたを育てている。要するに、土から生えてくるものを使つて、食べ物だけでなく、生活のありとあらゆるものを生み出していました。その全てにいわゆる百姓というものが関わっている。そして、できあがつたものを動かす人が必要ですから、農民の商人化が江戸時代に起るわけです。そういうようなものが見えてきますと、やはり江戸時代の農民というのは、単に土から出てきているものを栽培している人という意味ではないと思います。そうして職人化が進みました。

ですから、農民の中の下人とか小作という階級制の問題より、階級制を残しながらも、貨幣経済の中に巻き込まれていく新たな動きこそが面白いなと思いますね。非常に動きが激しい。農民の社会そのものの変化がものすごく大きくて速いという気がする。そういう意味でも私は網野さんの視点、水呑は商人だったという考え方は、興味深いと思います。

橘川●能登では水呑と言わないで、頭振あたまふりという呼び方をしますけれど、要するに無高の民なんです、これが実態は商人であつたりあるいは職人であつたり、他の職業をもっている。百姓でも一斗三升くらいの高しか持っていないのも少なくない。彼らは、どうやつても農業だけで食べるはずがないわけで、廻船やつたり他のことで実は食っているわけです。高がついているものが百姓であつて、それが農民だというのはもう全く間違っている。

田中●ええ、まず百姓たちの能力の幅がものすごい。一人でもつている能力もすごいですが、その能力の種類の多さというんでしょうか、だれがどういう仕事かということをばつきりと分けることができないほどです。さつき言いましたように、特に江戸時代に入ると、商売できないと生きていられないというのが全般的傾向になってくる。物を動かして生活をしていく社会ができていきます。それを考えないと、どうしてあれだけ寺子屋が全国に増えていったか解けません。村落にもものすごい数ですね。特に幕末になると。その説明ができないですよ。どうしても読み書きそろばんが必要になってくるということが農村で起っている。

それから、作る物の種類の豊富さも注目すべきですね。町の職人さんの数は高が知れています。農村で作るしかな



い。工場みたいに人が集められて一斉にやっているわけじゃなくて、家内制手工業でおこなっていて、しかも非常にレベルが高い。今の下請け中小工場も職人として世界で一流ですが、それは百姓の伝統ではないでしょうか。そういうようなことは、文学を見てもわかりません。江戸時代の文学は極端に書くことはあってもかなり実生活を反映しています。

橋川●そうですね、実際に人の動きも非常に激しくて。江戸時代はもつと動きの激しい社会だという風に考えないと、何ていうか土地緊縛が激しくて、土地の売買もできなくてというようなイメージは完全に捨てる必要があるなと

たなか・ゆづこ

一九五二年神奈川県生まれ。法政大学社会学部教授。専門は日本近世文化、アジア比較文化。研究範囲は江戸時代の文学、美術、生活文化、海外貿易、経済、音曲、「連」の動きなど。江戸の想像力―一九八六年度芸術選奨文部大臣新人賞、江戸百景―二〇〇〇年度芸術選奨文部科学大臣賞、サントリー学芸賞。二〇〇五年紫綬褒章。その他に「近世アジア漂流」樋口一葉「いやだー」云々など多数の著書がある。

僕は思っている。

田中●網野さんの考えでは、定住と移動ということとで言うと、江戸時代は定住人口が増えたから、動きが少なくなっただけというふうなそういう筋書きにはなっていますよね。しかし江戸時代に入っても、移動人口は非常に多いと思う。

橋川●まあそうですね。例えば佐渡の相川の金山が活発だった頃には、金山の周辺だけで十万くらいいた。佐渡全島で言ったら十五万はどんなに少なくともいただろうと。今は八万もいないですからね。あれは能登辺りからどんどん入っていったわけですね。

田中●能登からも入ったんですか。

橋川●ええ。だから加賀藩は禁令出すんですよ。佐渡行きは禁ずるという。近世前期、鉱山関係なんかは本当にそういう人間の動きがあった。それが享保の頃ですかね、やっぱりちよつと動きが止まるかなあと思われるのは。享保とか、寛政とかといういわば反動改革期のイメージで江戸時代というのはどうも考えられている。



写真Ⅱ小畑美史

田中●時々そういうのがあるというだけのことですからね。あまりにも異常な事態になると離農を禁止する方策を出しますが、おさえるのは無理です。それに離農というわけじゃなく、戸籍はそこにありながら、実際にはそこにいない人の人口も多くて、それは今と同じです。

私は文学からいつも見ていたので、発想が具体的なんですよ。一番おかしいと思うのは封建制度という言葉です。封建制度というのは具体的に考えたときにいろいろな問題が出てきて、江戸時代が本当にヨーロッパの封建制度と同じなのか整理しなければならぬのですが、その一言で片付けてしまっているようなことがあって、これは文学を

やっていきますと、実感と違う。

海外と繋がっていた庶民生活

田中●それからもう一つ、文学は生活の素材がどんどん入ってきますから、生活のことは分かっているけれども、衣食住を分かってなければ読めませんので、衣食住を見るようになる。そうするとそこで気がつくのは、庶民生活の中に海外の影響がたいへん強い。上のほうはさほどではないのに庶民生活の中に海外情報や海外の流行が入ってきて動いています。

商品生産とか商品の付加価値というのでしょうか、付加価値をこのようにしてつけるから商品が動くと。商品が動くから国内需要で済む。国内需要だけで済んでいるというのは、江戸時代の停滞感の一つですけれども、実際は商品が動いています。お金が動いていますから、それで十分生活できる。それは物だけでなくて付加価値、商品価値なんですね。その二つを実際の生活を見ると見えてくる。それが

きつかわとしたた

一九四五年八月北京生まれ。東京大学法学部卒。神奈川大学法学部教授。著作に、「近代批判の思想」（論創社）、「芦東山日記」（平凡社）、「歴史解読の視座」（共著・御茶ノ水書房）、「柳田国男における国家の問題」（神奈川法学）、戦後は終わらせない」（本誌創刊号）他。

見えてくると、なぜ職人が多くなつたかわかります。もう地球全体が視野に入っています。大航海時代のころからヨーロッパだけではなくて日本にとつても中国も、地球全体がつながっています。朝鮮半島はちよつとまだそういうところありませんでしたけれども、中国の明の時代から世界状況や世界地図も思考の中に入っていますね。私が注目しているのは、十六世紀になると、アメリカのこともちゃんと視野に入っていることです。要するにメキシコ、ペルーです。メキシコの銀生産のことが視野に入っています。江戸時代の人々の中の世界地図というのは地球全体なんです。

これはそれこそ観念的にそうなっているのではなくて、物が入ってきてしまうからです。物が動いているのが見えちゃうということです。海外文化は衣食住に大変な影響を与えるようになります。銀生産は、中国の生糸・絹織物を日本に呼び込む。逆に、南米の銀の中国大陆への流入があるから、今度は日本の銀が相対的に乏しくはなっていますし、日本の銀が動かなくなっています。そういう世界経済の変化があるので、私は、江戸時代は世界の動きを見ていたほうがよく分かるといつも言っています。今と違って非常にスピードがゆっくりしていますが、世界経済が動いている。結果として日本が物を買えなくなる。銀の価値が落ち、それで中国の物資はそれほど多くは買えなくなる

からです。それから、銀そのものが枯渇したり、新しい技術が必要になつてくる。地球の裏側ではアマルガム法を使っていますので、灰吹法では間に合わなくなっている。そのことがあつて佐渡の開発も行われるけれど、それでも間に合わないものですから、秋田の阿仁銅山の開発がある。そうすると銅で取引しますので、今までのような商品の輸入ができなくなる。自分たちでつくっていくしかなくなります。農村に住んでる人たちは職人化していく、という順番になります。

何が具体的に国産化していくのかというと、たとえば、インドネシアから砂糖が入ってくる時期があり、琉球から砂糖が入ってくる時期があり、やがてそれが国産化されていく。それから、陶磁器の磁器が輸入だけの期間があり、九州で生産されていく期間があり、やがて瀬戸で生産されて江戸まで来るようになる。十九世紀になつてはじめて江戸まで来る。はつきり見えるのが衣類です。中国から生糸、絹織物が入っていた。それが、織物生産ができるようになって、生糸だけになる。そのうちインドの木綿がやってくる。インド木綿は幕末までずっと輸入し続けるんですけども、需要が多くなるから足りなくなる。結局国内生産ということになつて、綿花栽培がおこなわれる。それから日本国内でとれる綿花で、インドの綿織物と同じ質のもの

のを作るようになる。縞織物しまが登場する。それが粋という感覚につながっていく、こういう順番になってくる。そうすると、いわゆる江戸的なもの、江戸らしいものというのは、そういう順番で海外の影響を絶えず受けながら国産化していく、その仕組みの中で作られていって、物と一緒に文化が作られていった。物に文化がくっついていったわけです。物と一緒に文化を吸収していって、それを流行化していくって、国産化していきます。そういう風に世界というものが見えているんですね。

橋川●その関連で言えば、綿花栽培が広がると、肥料の問題が出てきますよね。九十九里辺りの鰯は、大体関西の綿花栽培地帯に行くのが一番多いんです。北海道の鯨にしんなんかもそうですが、国内のそういう大型の網の漁業が盛んになる。その経営は、相当広範囲から労働者を集めないとは実はいけない。それがかなり社会構造を変えてきてしまっている。まあそういう意味では、木綿とかが入ってきて一般化していくことが、封建的なとか固定的な社会観では絶対に捉えられないいろんな現象を引き起こしている。

田中●西鶴も書いていますね。漁業が持っていた当時のイメージというのはすごくバブリーなんです(笑)。つまり、一攫千金狙うには鯨獲ればいいみたいな話なので。つまり、漁業というのはとにかく儲かる。みんなが飛びついていく

んですよ。そうやって能力を発揮して中心になる人が突然出てきたり、それから離れていく人もいる。多分労働者の出入りがものすごく大きいと思うんです。大量の人が必要で、しかも一度に入るお金も大きいですから、漁業の動きというのはきつと西部開拓史みたいな動きですよ(笑)。

橋川●貨幣経済というか、投機的な動きというのはものすごく大きいですよ。

田中●そう、投機的ですよ。それから干鰯ほしかそのものは鰯獲いじれぱいいということではなく、鰯を獲った後にそれを肥料化していく手続きというのは何通りもありました。粉にするやり方だとか、水の中に入れて発酵させるやり方だとか、そのまま入れるやり方だとか、半分干すやり方だとか、カラにするやり方だとかものすごくたくさんの方がある。当然そこにそのための職人というのが生まれてきます。その辺のところで、新しい職業というのでしようかね、中世までにはちよつと見られなかったような新しい職業が育っているなという気がします。

情報も人も繋がっていた

橋川●そうですね。東北の鉱山の歴史なんか調べると意外とキリシタンが多いですよ。鉱山技術をもったキリシタ

ンが、隠れというか、半公認で布教活動さえしなければ存在が許されるというようなところがあって、それが結構東北の文化を支えている部分があるのではないか。近世の初頭伊達藩なんかは、技術者としてのキリシタンを相当たくさん入れているようですね。

田中●東北はそうでしょうね。『江戸百夢』の中にも書いたんですけれども、弾圧されたときに、相当量のキリシタンたちが外に出ないで、つまり東北、北海道に移動している。それで鉾山に入っている。それは技術者もいただろうし、鉾山労働者として入っている人もいる。そこに行けばおそらくかくまってもらえたのだと思う。そうやって日本の中に紛れ込んで、生きて死んでいったという人たちも相当いるはずで、しかしそれは江戸時代初期の話ですから、その後秋田蘭画なんかも生まれますけれども、それはまた別の問題です。

鉾山があるってすごく大きなことで、秋田蘭画の発祥は鉾山が、阿仁銅山あにがあったから平賀源内が来る。その歴史で出てくる。佐渡もそうですよね。いろんな人が出入りして、他の日本の土地にはない混合文化を作り上げている。ですから、そういう意味で江戸時代の鉾山地の文化は、やっぱり大事なテーマです。

橋川●そうですね。幕末の史料ですが、軍談師の旅日記と

いうのを見つけたことがある。

田中●ああ、軍談ですね。

橋川●東北の大東町という岩手山地の真ん中にある芦家という家から江戸まで来る間の簡単な日記なんですけど、これが、行く先々がほとんど鉾山なんです。鉾山に行つて、そこで一席打つて、一席あたり例えば二朱とかもらつて、それで飲み食いして、まあ旅稼ぎをしている。これがおもしろいのは、旅稼ぎで江戸へ金をもつて帰るかというもつて帰らないんですよ。現地で全部消費してしまう（笑）。それで足りないとか袖置いてつちやつたとかね。そういう形で、鉾山を中心に動いている人たちがたくさんいて、それがあつた種の文化を運んでいる。山の中の鉾山というところに、実はそういう人たちが来て、普通のむしろ農村的なところとはまた違った文化をつくっている。

田中●おっしゃるとおりで、現在の日本の中で、江戸時代の人形浄瑠璃の一番古い形が残っているのが佐渡です。佐渡に行った芸人たちがものすごくたくさんいて、その中で残ってきたんですが、例えば文弥人形ぶんやというのはもう江戸では近松以前に滅びてしまったジャンルですが、それが残っている。さらに時代をさかのぼる説経節せつぎょうふしも残っている。

農村歌舞伎は農村に残っているのですが、これも流れ者が伝えた文化なんですよ。そういう意味では、中世だけ

でなくて江戸時代に相当たくさんの方が移動していたのではないか、と思います。

橋川●俳句の連の研究なんかをしている人がいますよね。僕も、神奈川県山城町の蕉門の主権者をやっていた人の家の記録を調べたことがあります。手紙なんかを見ると俳句のやり取りしている範囲が全国にわたっている。で、その手紙の中に、単なる俳句のやり取りだけじゃなくて、例えば景気の動向であるとか、そういうことも含まれている。そういうことで言うとか非常に幅広い情報のネットワークを江戸時代の人たちは実はもっていたのではないかと。

田中●江戸時代では俳句ではなく俳諧といい、連ではなく俳諧の座というんです。「座を巻く」というんです。「連」という言葉は狂歌で使う。俳諧の座は蕉風で完成するのですが、それこそ旅です。旅をしないと全国に広がっていきませんから、俳諧師たちは旅をする。非常にたくさんさんの俳諧師たちが旅をしながら食べている。これは好んで旅しているわけではなくて、生活そのものです。旅をしないと生きていけません。

橋川●さっきの軍談師と同じようなことですね。

田中●そうですね。非常に似ています。一茶なども狭い範囲なんですけど旅をしていますし。それぞれテリトリーがあるんですよ(笑)。

橋川●縄張りというかね。

田中●自分のお客さんのいる縄張りというのがありますが、それをお互いに侵食しないように、そして忘れられないように、お客さんのところに定期的に行くんです。芭蕉もその反復だったと思う。芸術家というようなものじゃなくて、当時、本当の俳諧師というのは旅の商人みたいなところがあります。おっしゃるように、歓迎してくれる一つの理由は、ただ俳諧を教えてもらえるということだけではなく、旅をしているからこそいろんな情報をもっていて、かなり裕福な商人と接触しますから、それこそ景気の動向とか、どの商品がどう動いているかということは相当詳しくなるはずですよ。そうした情報を得られてみんな喜ぶというところはあつたんじゃないでしょうか。

橋川●佐渡の外海府に岩谷口というところがありますが、そこに、近世の初頭に結構大きな廻船人がいたんですよ。江戸時代初期の廻船の状態がよく分かるんですけれども、そこにも書状がたくさん残っている。津軽・下北から、下関、当然大坂まで動かしていますが、その商人のやり取りの手紙です。どこそこの米が今相場が安いから買えとか、九州が今年不作だから向こうにもって行ったら高く売れる、とか書いてある。寛文・延宝期に手紙のやり取りでそういう情報がもう動いている。

田中●農業と商業と、それからあと、情報で言えば本草学ほんそうがくの

ようなものです。つまり農書と本草学書がある。この二つは連携しあっているはずで、本草学者は最先端の開発実験をしますが、農業と連携しないとできません。ですから本草学者というのは薬だけでなくて農業指導もしています。農業指導はやがて武士たちもするようになります。武士たちが本草知識を得るようになっていきます。そういう関係も非常に大事な関係なのではないかと思っています。今までの歴史だと、それぞれの藩が情報を秘匿して出て出さないと、種を出さないとかわれていて、確かにいくつかの種類ではそういうようなところがあるんですが、どうも現実にはそういう風になっておらず、ものすごいスピードで情報が動いていて、技術革新が行われている。

「多社会」社会と江戸の江戸

橘川●そうなると、江戸時代というのは封建制と言っているのか、あるいは、そういう商取引や情報の流通の実態から言ったら、資本主義と言ってもおかしくないんじゃないかというような感じもするんですけれど。

田中●そうですね。歴史学はどうしても政治史の側から見るという傾向があつて、幕府の側から見ると資本主義じゃ

ないという話になります。もちろん基本的には商人からは年貢は取らない。要するに無税ですよ。現実にはそうではなくて、いろんな仕組みがあつたりするんですが、だけれど基本的には無税。そうすると、仕組みはそのままにせざるを得ない。要するに武士階級が貧しくなったのはもう当たり前なこと、どんなに努力しても貧しい。どんどん貧しくなってしまうんですね。ですから、今の私たちがもっているような税金のシステムがないというようなところで見ると、資本主義とは言えないかもしれません。しかし庶民生活の方を見てしまえば、貨幣を基本にした生活という意味ではほとんど変わらない。お金が世の中を動かしっている。そういう社会になっているんですね。

橘川●まあ、江戸時代の文学でもお金が世の中を動かしているという表現がたくさんありますね。

田中●ええ、そうですね。

橘川●幕府とか藩とかという建前の世界と、普通の庶民の暮らししている世界とが完全に二重化していて、上だけ見ると封建制ですけれども、確かに。下級武士で、あれしか給料もらわなかったら貧乏になるに決まっています。職業選択の自由が一番ないのが武士ですよ。

田中●そうですね。いろいろな意味でもつとも惨めなのが武士なんですよ。例えば女敵討ちなんて、まあ敵討ち一般

があまり行われはしませんでしたけれども、そういうものが奨励されているような世界というのは武士社会だけです。江戸時代を、不義密通だとか女敵討ちだとか復讐の世の中だという表現をする人もいるんですが、それは非常に特定の社会、つまり人口の一割ほどの武士の社会だけに限定されていた事柄です。復讐を「名譽」の名の下にむしろ奨励され、要求されている。武士の立場から言う并要求されてしまっているわけですよ。本当に気の毒ですよ。一番かわいそうな人たちという気がします。

橘川●そうですね。中津の福沢諭吉の生まれた家というと、能登の時国家という家を較べたら、福沢諭吉の家はちゃんとした武士ですが小さな家です。時国家というのは、ものすごい立派な家ですからね。じゃあどっちが身分的に上だ下だということを言っている、それは単なる制度、建前の話で、実体的な実力から言ったらやっぱり武士でないものの方がはるかに実力や情報網ももっている、というのが江戸時代の実態だろうと思うんですよ。

田中●秋田の角館は非常に面白い。あそこは武士社会の序列が建物でそのまま見えるところなんです。城跡に近い方から次第に地位が下がっていく。広さが変わってくる。下の方に行くと庭で野菜作っていたようです。藤沢周平の世界です（笑）。本当に貧しくて、野菜などは細々と自給自足

しているんですよ。格差社会です。武家内格差社会っていうかにすごいというのが分かります。

橘川●侍長屋住いの下っ端なんているのは本当に内職やっている。

田中●幕府の御家人たちが暮らす新宿や千駄ヶ谷の同心町では、幕臣たちが自らツツジの栽培や昆虫の育成をしていました。つまり内職です。

橘川●それである程度成功すればいいんでしょうが、武士は体面から逃れられない。

田中●そういう意味でおそらく、武士が才能のある人であれば、出版界で有名になることができるということです。江戸時代の戯作の世界で一番幅を利かせていたのが武士ですね。江戸の戯作は町人のものだというのは嘘で、武士が開発したジャンルです。特に黄表紙きびょうしという今で言う漫画ですが、子どもが読んでいた、全てのページが絵でできている絵本を大人向けの内容にして売り出した。非常に売れた。それをやったのが恋川春町という人です。駿河の小島藩の武士、藩士の倉橋格のことです。そういう人が始めて、そしてそこに町人が参入してくるわけです。浮世絵なんかもそうですよね。広重も武士です。それから十返舎一九はもともと大坂で浄瑠璃書いていた人ですが、武家出身ですから、香道をはじめとして非常に教養がある。鈴木

春信という浮世絵をカラー化した人物がいるのですが、この人についてはよく分かっているんですね。ただ、絵のテーマから見て非常に能に詳しい人であるということは分かっている、武士の可能性が高いと言われています。

そういう武士的な教養をもった人たちが、文化の世界に参入していった、そして新しい職業をつくっていくという動きがあった。もともと出版は京都が中心ですが、江戸の本が大変な成長をしていく、十八世紀の後半成長していく。そこに武士たちがいた。町人だけではできないですよ。江戸という都市は武士の人口が半分以上でした。これはもう特別な、他の都市にはありえないような人口比率です。しかも彼等は貧乏だった、ということがすごく大きなことです。裕福だったらそんなことしないわけですから（笑）。食べられなかったら何とかしなくちゃいけない。それでいろんなものが生まれてきたということが言えると思いますね。

橘川●だから逆に塚本学さんの研究だと、学者、儒学者なんかは武士よりもむしろいわゆる村役人層の上層あたりからたくさん出ています。今の話だと、江戸の武士の方からいわゆる戯作者みたいのが出ています。そう見ると、江戸時代の文化というのはちよつと構造的におもしろいですよね。田中●それに階級間の区別がなかなかつかない。いまおつ

しやった農民層の上の方とは、名主、庄屋あたりですね。郷士というのもそうですが、これはわけの分からない存在で、芭蕉の家が郷士ですね。農民なのか武士なのかよく分からない。身分としては明らかに農民なんだけれども、非常に大きな力をもっている層というのがある。村方三役は大体そうですね。そういう人たちのところに本が集まってくるし、貸し本屋もそういうところに入りしていますし、もちろん本を読みたい人は、名主のところに行き、本を借りるという行動が見られる。そういうところで勉強してきた人たちが寺子屋をつくるということが見られる。それらを考えると、農民と武士の間もなかなか切れない。

それから職人もよく分からないです。大工の棟梁つてやっぱり特別な人たちで、この人たちと、いわゆる職人は異なる。棟梁は職人なのに武士との区別がつかないんですよ。町年寄、町名主もそうですね。江戸の場合には三人の町年寄が知事のような働きをしています。ほとんど町年寄、町名主が行政を担当しています。そうすると、そこが「官」ですね。働きとしてはそういうふうになっています。

土農工商だけではなく、遊女とか穢多とか非人が果していた役割もたいへん重要な役割だと思っっているのです。社会的な要請があるから彼らがいるわけです。革製品の需要というのは戦国時代非常に多かった。江戸時代になって廃

れるのかと思うとそうではなく、三味線が登場するし、太鼓は量産されるし、商人たちはほとんど皮足袋をはいていた。穢多たちの仕事の独占が幕府によって保護されていて、しかも多岐にわたってくる。江戸時代になると燈心作りだとかたくさんの種類に分かれてくる。弾左衛門の権力は非常に大きく、裁判権も経済力も持つている。弾左衛門配下も全国を動き回っていて、情報交換をしていて、仕事の独占システムを確立しています。すると、社会の中に身分というのとまた違う社会グループがそれぞれある、ということになります。盲人組織・当道座もそうですね。

これは福祉なんてなくても自分たちでとにかく職業を独占することで生きている。穢多のグループとそれから非人のグループとか、それから当道座のグループだとかというそれぞれ社会の中の社会というんでしょかね、遊郭もそうですが、社会の中の社会があつて、それぞれの社会が自立した状態をつくっていった、それで相互依存しながら生きています。そういうイメージです。藩もそうですね。今ほどちらかという中央集権なので、ほとんどどこでも同じシステムになつてしまっているけれど、それぞれの人たちが自分たちの負っているハンディキャップだとか、それから歴史だとか、そういうものに合わせて社会グループをつくっていて、それが容認されていて、弾左衛門組織のよう

に幕府と渡り合つて、権利の主張までして、裁判権までもっている。こういうような多社会社会というんでしょかね、それがまたおもしろいと思いますね。

動きと繋がりが生み出す想像力

橘川●今はインターネットとかテレビ、マスコミ等々で世界中の情報がほとんど瞬時にリアルタイムで見られる。そのことが本当に世界を認識するための人間の能力を高めているのかというと、どうも高めているとは思えない。むしろ発達すればするほど人間の個別にもつている想像力というのは小さくなっている気がする。例えば今の方が江戸時代よりもはるかに正確な世界地図があるけれども、例えばどこにどんな人が住んでいるかということについての知識の量に関して言えば、ほとんど変わらないんじゃないか。だから今は、世界のことを知っているかのように錯覚をしているだけであつて、実は江戸時代の人と、あるいは江戸時代で想像力を働かせている人に較べたらはるかに能力は低下しているのではないか。そういう意味で、『江戸の想像力』というタイトルは非常に興味をひかれた。江戸時代の人たちがどれだけの世界についての知識をもっていたかということと、それから世界を知ろうとする想像力の働かせ

方ですね。そこで何か江戸時代の人たちの想像力の働かせ方の、すばらしいところというか、おもしろいというようなところをちよつとお話いただければ。

田中●彼らは、一冊の本から吸収するものの量がものすごいですね。例えば、平賀源内はオランダ語が読めなかった。読めなかったけれども、日本で一番蘭書をもっていたのは平賀源内なんですね。そこにどういう仕組みがあるのかというと、自分の能力で読み解けないものは人に聞く。考えてみれば当たり前のことですが（笑）、翻訳されるのを待つてたりはしないわけで、必要な場合に、とにかくつながらりをつくる。で、聞きながらそれを得ていく。その聞きながら得ていく過程で何が起るかという、人同士がつながっていくんですね。そうやって『解体新書』ができてしまうという結果になる。そういうありようがあつて、私は、単に一人の人間が頭の中で色々考えているということは想像力とは言つてません。そうではなくて、ある想像力が働いて誰かが動いたと。動いたときにつながる。そのつながりは次のつながりを生み出す。そういう風にして文化が出来上がっていくというその実態があつて、その全体を連と呼んだのです。

これは学問の世界もそうなんですけれども、一冊の本が出来上がっていくプロセスだとか、浮世絵の技術が発展し

ていくときのありようだとか、それから今までなかったものがつくられるようになることとか、に結実してゆきます。私は金唐草というものを事例にしてやりましたけれども、もつと広く言うそれは国産化システムでもあったのですね。外国から何かを一つ手に入れた。で、それを自分でつくろうとする。自分の力だけではできない。いろんな人に聞いたたり、文献を読むということをして、例えば銅版画の成り立ちなんかそうですが、アジアで始めて日本人がアジア人の手による銅版画をつくるわけですね。

これは誰かが教えてくれたわけではない。本はオランダ人が江戸の長崎屋で売っている。ところが司馬江漢もオランダ語が読めない。と、誰かに読んでもらいますよね。そういう風にして新しい技術が本によつて移入されてくることがある。ものを見て分かつて、理解して、エレキテルがそうですけど、ものを見て学んで作れるようになる。それから人とのつながりで得ていく場合もある。大体その何通りかのやり方をしているんですが、その場合、一個のもののだとか一冊の本だとかから得ている情報がものすごく多い。それをただ読みました、知識です、ということではなく、得たら自分でつくる。それから、得たらその次の技術につなげていく。それから分かなければ誰かに補充してもらふという行動につながる。あらゆることが行動につな

がつているし、それからものとして、本当にものとして目の前に現れてくるものしか信じないと言えいいいんではないか。

もちろん思想家たちもたくさんいますから、ものとして現れてくるばかりだとは思いませんけれども、でも思想家たちの動きを見ても、ネットワークがものすごい。つまり自分の師から教わっているというだけではなくて、旅をして学んでいることは大変多いし、それから他の人たちから教わっていることも多い。そういうつながりの中で得ていくものの大きさというのを彼等が非常に認識しているということですね。もう一つは、それを記録に残すこと。

記録に残すということというと、私はやつぱりそれは中世とは違うなつて気がするんです。相当たくさんの人たちが文字を読めると同時に、書きたがる。絵にしたり文字にする。菅江真澄みたいに旅をして書き続けるというような人も出現したりする。そういうことと言うと、私は江戸時代の想像力というのは行動と深く関係していると思います。

橘川●今の学者はあまりそういう風に言ったらあまり動きたがらない。

田中●それはもう学校制度のせいですよ。学校制度があつて私たち教員は日常的に拘束されていますから。大学やめないと旅はできないですよ。

橘川●今はそういう風に実は動けなくなつていんだということを、我々は自覚化しなくてははいけなくて、情報の流通と移動手段はどんどん発達するけれども、しかし人一人ひとりの人間の動き方を見ると、実は随分減退しちゃつていっている風に考えるべきじゃないかと。

田中●むしろ江戸時代よりさらに定住化が進んで、縛り付けられているということなのかもしれませんね(笑)。江戸の中の旅と言うと、武士と町人の交流がものすごいですね。ほとんど友人のようにして、お互い武士と町人たちがやり取りしている。これが、私が狂歌連の中で描いたことなんです。狂歌連というのはその土地で歩いていける範囲です。例えば牛込に住んでいる武士たちだとか、大塚空間的な範囲ができています。しかし町人と武士の間は交流があつて、特に版元と武士の関係が非常に密接なものがあるんですね。ああいうのを見ると、身分間の動きというんでしょかね、お互いの身分というのは一体どういふものかということが分かつてしまふし、ただお金を落とすつてだけではなくて、町人が一体どういう価値観でどうやつて生きているのかというのを武士は初めて知ることになるわけですよ。で、そこでできてくる融合文化があつたと思います。

橘川●多岐にわたるお話をありがとうございました。